

3日目(10月21日)の朝が来た。今日は樂山大仏を見に行く日だ。それから夕方までに樂山から宜賓まで行く予定である。朝9時に予約してあったタクシーが「峨眉山瑞邦莫麗酒店」前に到着。一路ホテルから東方の樂山市に向かう。樂山市は、成都からは南に160キロメートルの所にある。10時頃、樂山大仏への遊覧船が出る場所に到着した。ここからは樂山大仏は見えない。この場所は、都江堰を通過して来る流れの早い岷江の船着き場である。接岸している船は200人くらいは乗れる結構大きなもので、2階建てになっており2階がデッキである。幅の広い川の向こう岸は、赤茶けた絶壁が続きその先の大仏の存在を想像させる。峨眉山市から樂山市までのタクシーから見える景色はずっと赤っぽい色の土である。

さて荷物をそばの預かり所に預け、遊覧船の切符を購入する。一人70元だ。我々は早速2階のデッキに上がる。顔に川風があたり気持ちがいい。天気は曇りだが薄く霧がかかっている。まもなく船は岸壁を離れた。川の流れは速く風景を楽しんでいるとすぐに大仏が現れてきた。スマホを構える間に船は下流に行ってしまう。何しろ天下の暴れ川との悪名高い「岷江」なのだ。がっかりしていると100メートルくらい流されたところで船は急に反転して上流に向かい始めた。今度は流れに逆らうので船はゆっくり進む。ちょうど大仏の前に来た時、船は流れに負けないように必死に踏ん張りながらそこに留まった。他にも2隻の遊覧船がやはり踏ん張りながら留まっている。乗船した人はここぞとばかりシャッターを切り始める。若い男女は自撮り棒で大仏をバックに我が物顔で写し始める。確かに大仏は巨大である。

樂山大仏は、弥勒菩薩をかたどって造られた高さ71メートルの摩崖仏である。摩崖仏とは、自然の丘陵の岩壁に彫刻された仏像である。この辺りは土も岩

も赤褐色をしているので大仏も赤褐色である。ただ長い年月が経っているので変色したり草で覆われている部分がある。大仏の両側には階段が伸びていて、上の方から大仏を見下ろせるらしい。高所恐怖症の私は水面から100メートルはあるところに行く気はさらさら無い。友人も霧で足元が濡れていて万一滑ったら困ると言っ行って行こうと言わないのでホッとした。それでも見ると階段には大勢の人が認められた。樂山大仏は90年もかけて803年、



樂山大仏とその前を流れる岷江

唐の第10代皇帝・徳宗の時代に完成した。今から約1200年余り前のことである。日本では、空海や最澄が活躍していた時代である。この場所になぜ巨大な摩崖仏を造ったかであるが、大きく二つの理由があると言われている。一つは、樂山地方は昔から塩がたくさん採れ、それが町の経済を潤していたらしい。それに感謝する意味があったこと。もう一つは、この辺りは洪水に悩まされており仏像

を建立し水の神様の怒りを鎮めようとしたことである。実際削った岩石を前の川に大量に捨て、浅くなった川は洪水が無くなったと言う。この辺りは、世界遺産で有名な都江堰を流れる「岷江」が都江堰市で成都平原に出て、眉山市を貫き樂山市で「大渡河」と合流するため水量の多い時期は洪水で人々を苦しめたのである。このシリーズでよく登場する「岷江」は、四川省北部の岷山山脈に発する全長735キロメートルの大河である。日本一の信濃川でも全長367キロメートルで、その丁度2倍でありかなりの長さである。岷江は最終的には明日行く宜賓市で長江に合流する。

大仏の高さは、71メートルと書いたが、像の本体の高さは60メートルである。752年、聖武天皇の時に開眼供養された東大寺の大仏は14.7メートル(過去2回焼失している。これは現在の大仏)、鎌倉の大仏は11.4メートルである(いずれも台座部分の高さ



都江堰により岷江は穏やかな流れに

を除く)ので如何に巨大かが分ろうと言うものだ。中国人のプライドをくすぐるのに十分な高さであろう。完成当時大仏は、「大仏像閣」と称する13層の木造建築物の中に置かれていたが、明代末期に建物が焼失し現在に至っている。

当時は多くの大仏が日本でもそうであるように国家によって造られたのに対し、樂山大仏は民衆の力で造られた。90年もかかったので親から子へ子から孫へと受け継がれていったのであろう。

我々はまた船着き場に戻り、それから宜賓に向かうため、バスセンターに行った。窓口に行くと12時10分発の「宜賓」行きの切符があったのでそれを購入した。このバスは、宜賓までノンストップで約2時間かかるというので、売店でパンや飲み物を買って待合室でそれを食べながら出発時間を待つことにする。バスは定刻に出発し、すぐ高速道路へ。一眠りして目を覚ますとまもなく到着した。そこからまずホテルに行く。ホテルは、「凱爾頓豪庭酒店」という。部屋で2時間くらい休んで、夕方外に食事に行くことにした。今日も一日無事に終わることが出来た。

ここで明日行く「宜賓市」について紹介したい。あまり聞きなれない都市である。私も友人がこの町の出身でなければずっと知らなかったに違いない。古くは「戎州」と言った宜賓市は、他の都市に無い特徴や観光地がある。この街の今の別称は、「酒都」である。中国の酒の種類はいろいろあるが、その中で「白酒」という度数の強い酒がある。中でも有名な「五糧液」という銘柄があり、これを醸造しているのが本都市である。白酒で一番の高級品は貴州省の「茅台酒」であるが、一番人気があるのは「五糧液」と言われる。

原料は、紅高粱(コーリャン)、糯米(もち米)、粳米(うるち米)、玉米(とうもろこし)、小麦の五つである。

宜賓市はまた、「万里長江第一城」とも呼ばれる。長江の最初の街ということだが、実は長江は宜賓市から上流は「金沙江」と呼ばれる。前述の通り「岷江」とこの街で合流し、長江はこの街から始まるのである。したがって第一城なのだ。長江は水源から河口の上海までを指すのかと思っていたが・・・世の中知らないことがたくさんあるものだ。信濃川が長野県では「千曲川」と呼ばれているのと同じであろう。

次に特徴的な観光地を二つだけ紹介したい。一つは宜賓市の南にある「竹海」という場所だ。文字通り見渡す限り竹、竹、竹である。あちらの山もこちらの山も竹で覆われている。流石にパンダの住む四川省だなと思いホテルからの運転手に聞くと、竹海にはパンダは住んでいないと言う。竹の生えているところはどこでもパンダがいるわけではないようだ。日本でも京都など竹林が有名などころがあるが、その規模は比較にはならない。実際に見なければ素晴らしさは分からない。

もう一つは、「夔人懸棺」である。宜賓市の南の「洛表」という町にある。この辺りは昔、夔(ボー)人といわれる少数民族が住んでいた。ネットによると、次のように解説している。【BC10世紀頃から歴史に現れ始め、一時は四川省、貴州省あたりで相当の勢力を持った。しかし明代(1368年～1644年)に漢民族の支配下にはいることを拒んだため、12度に亘る攻撃を受け最終的に1573年の戦闘で滅亡した】とされる。末裔も確認されていないというから徹底して殺戮したのであろう。この民族には特異な習慣があった。それは絶壁の高い場所に木の杭を打ち込み、二つの杭に横にし木棺を載せて死者を吊ったのだ。今でも洛表周辺に多く残されている。それが最初の漢字4文字で表現されている。つまり〈夔人の棺桶を(絶壁に)懸ける〉である。私がショックを受けたのは、漢民族がこの民族を滅亡させた上、記念碑を建て観光地としていることである。鎮魂のための式典は毎年有るのであろうか? 今回は時間がなかったので行けなかったが、いつか現地を訪れてこの目で本当の所を確かめたい。

(続く)